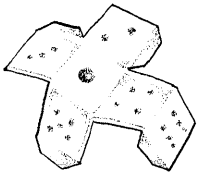
子どもたちへのまなざし (23)

トイレのごみ箱に捨てられた孫娘

松井　とし



県民センターで幼稚園の先生方を対象にした研修会の受付をしていた時のこと、「三歳児から幼稚園に行かせる必要があるのでしょうか」と、年配の女性に声をかけられた。たまたま通りがかったら、幼稚園の先生の研修会の掲示が目に止まったのだという。

傍らの椅子にかけて話を聞き始めると、その人の二歳の孫娘の言葉が遅く、他の子どものように遊ばないという悩みだった。娘の連れ合いであるその子の父親も小さい頃は「口数が少なくおとなしい子どもで、友だちと遊ぶのが苦手だったそうだ」というエピソードやまわりに小さい子どもが全くいない生活環境の話に続いて、有名幼稚園の「お入園」にからんだ話につながっていった。

ある幼稚園の入園テストに合格させるために幼児教室へ通い始めたところ、子どもが泣

いて母親から離れなかった。するとそこの指導者は、母子分離のトレーニングを提案したという。そこでこの人は孫娘を預かり、「まずは子どもに慣れさせよう」とデパートのおもちゃ売り場にあるプレイコーナーに連れて行った。ところが孫娘は、まわりの子どもたちのようすを見ているだけで一向に遊ぼうとはしない。無理に押し出そうとすると大声をあげて泣き出した。あんまり泣くのでトイレへ連れて行き、「そんなに泣く子は捨ててしまう」とごみ箱に捨てた。子どもは「泣いちゃいけない」というおばあちゃんの要求に応えようと泣きじゃくりながら必死に頭を下げ、「ごめんなさい」をする。ようやく泣き止んだ子どもを連れて戻るが、状況は変わらない。おばあちゃんはまた腹を立てて彼女をトイレのごみ箱に捨てる。こんなことを繰り返した、という話だった。

「かわいそうだったでしょうか？」と聞くこの人に対して、私は相談の基本を忘れて思わず「それはかわいそうです」と答えてしまった。「だって泣き止まないんですもの」。最後にもう一度「かわいそうだったと思いますか？」と聞き、「私の娘も見ていられないと言っています」それだけ言うと、その人は何事もなかったかのように立ち去った。

孫娘のことを思えばこそ、何とか有名幼稚園に入園させたいという情が、本人の気づかないうちに子どもの心を痛々しいほどに傷つけている。生まれてからわずか一千日も経っていない幼な子の「虐待」、その実態を垣間見た思いだった。

（元幼稚園教諭）